

適応性を育む外国語活動の創造

ー考えるよさに気付かせる学習指導ー

高 味 淳 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

Foreign language activities with the study guidance which enables students to notice various aspects of language and thought

TAKAMI Jun

キーワード：外国語活動、適応性、思考、学習指導

1 研究の背景

グローバル化が進む現在、とりわけ国際協力を基盤として、異なる文化の共存や持続可能な社会の発展に向かうよう努力することが必要であり、その重要な要素としてあらゆる段階でコミュニケーションがあげられ、コミュニケーションを通して互いの関係を深めていくことが大切である。

しかしながら、互いの認識や関係を深めることは必ずしも容易ではなく、コミュニケーションの過程において、人はしばしば言語や文化、考え方等の違い（壁）に直面する。例えば、互いのことを全く知らない外国の人に出会った時、また外国の人と交渉や折衝をする時はその典型であり、身近な友達同士で疎通を図る時であっても、その壁を意識させられることもある。大切なことは、言語や文化、考え方の壁に直面した時にそれを乗り越えたり、自分との距離を縮めたりしていくことであり、個々人がそうした資質・能力をもつことである。ここでは、言語や文化、考え方等の違いに当たっても相手とかかわり、適切に対応していく資質・能力こそグローバル社会において重要であると考え、それを外国語活動における「適応性」と捉えた。（※ここでの「適応性」という言葉は鹿児島大学教育学部教授濱崎孔一郎氏から示唆してもらったものである。）

さて、この「適応性」という視点から日本人のコミュニケーションの状況を見たとき、外国語の使用への自信不足や異なる考え方への関心の低さから、コミュニケーションを十分に図っていない状況も見られる。また、外国語に関わらず、子どもたちの日常生活におけるコミュニケーションに

おいても、自己や他者の感情や思いを言葉で表現したり、受け止めたりする表現力や理解力が十分でないとの指摘もある。さらに、他人の視点に立ったものの見方や考え方を踏まえる重要性も示されている。

これらの状況を踏まえ、平成23年度から全面実施された外国語活動を学ぶ意義を考えたとき、「適応性」を育む上で重要な役割を担っていると考えた。なぜなら、外国語活動は、外国語を通じて、異なる言語や文化への理解や相手とコミュニケーションを図る大切さや難しさを体験的に捉えることを目指した活動であり、まさに「適応性」を育むことを目指すことのできる学習の場と考えるからである。つまり、外国語活動は言語教育、国際理解教育の一環であり、活動を通して相手との壁を乗り越え、互いの見方や考え方等を共有していける力や態度を培うことができる学習である。そして、この力や態度が土台となり、世界の人々と共存し、平和で住みよい社会を築くことにつながると考える。このような適応性をもった人を育むために、これまでの研究や子どもの姿を踏まえながら、外国語活動の充実をより一層図っていくことにした。

2 研究の方向

上記のような背景を踏まえつつ、本校の子どもの実態から「適応性」を構成する要素として、「協働する」「理解する」「考える」姿の3つを設定し、以下のような子どもの育成を目指した。

【他（相手や言語・文化）に対してかかわりながら、コミュニケーションを通じて相手のことを理解しようとする態度をもち、思考・判断し、表現を工夫したり、多様なものの見方や考え方に気

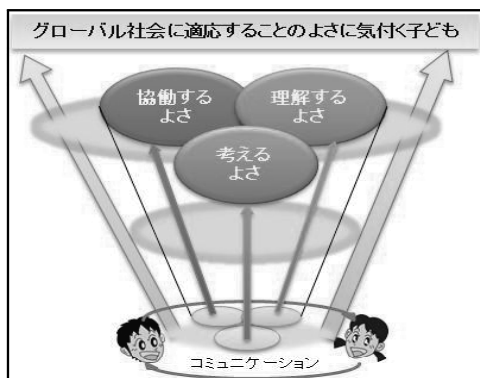
付いたりすることのできる子ども】

他（相手や言語・文化）に対して、かかわろうとする態度をもっている子どもは、互いに働きかけ合うことによって得られる喜びや自己の高まりに気づき、「協働する」よさを感じている子どもであると捉える。

また、相手のことを理解しようとする子どもは、相手の考えをしっかりと最後までよく聞き、解釈していくことで自分と比較し、相違点や共通点があることに気付く楽しさを知り、相手を「理解する」よさを感じている子どもであると捉える。

さらに、多様なものの見方や考え方に気付いている子どもは、相手意識をもち、伝える内容を豊かにするコミュニケーションについて知っており、物事を多面的に最後まで考えていく楽しさ、すなわち「考える」よさを感じている子どもであると捉える。

このような子どもを図1のように、「グローバル社会に適応することのよさに気付く子ども」と定義し、目指す子どもを具現化するよう「適応性を育む外国語活動の創造」と題して、研究・実践を重ねてきた。（図1）



【図1 目指す子ども像】

その結果、以下のような成果と課題を見出した。
＜成果＞

- (1) 課題解決の見通しをもち、友達と協働しながら活動を計画し、コミュニケーションを図ろうとすることができた。
- (2) 相手の思いを理解しようと問い返したり、うなずいたりしながらコミュニケーションを継続して図ろうとすることができた。

これらのことから、適応性の要素である「協働

する」「理解する」姿については、子どもの姿として表出していることがわかる。

＜課題＞

● 自信をもって会話をし、内容を発展しようとすることができなかった。この姿が見られた要因を以下のように分析した。

まず、自信をもって会話ができないことは、使いたい英語がなかなか身に付いていないともに、使える語彙量が限られているためと捉える。また、会話の内容を発展しようとすることができなかったことは、会話を発展させる方法が分からなかったり、発展させるための背景知識が乏しかったりしたためと捉える。そこで、使える英語や外国の言語や文化についての知識を増やし、考えながらコミュニケーションを図っていく姿を目指していくことが必要である。すなわち、適応性の「考える」要素について焦点を絞り、研究副題を以下のように設定し、外国語活動の充実を図っていくことにした。

適応性を育む外国語活動の創造 ～考えるよさに気付かせる学習指導～

3 考えるよさに気付かせる学習指導とは

本校外国語活動における「考えるよさに気付かせる学習指導」とは、多様なものの見方や考え方に気づき、相手意識をもち、伝える内容を豊かにするコミュニケーションについて知り、物事を多面的に最後まで考えていく楽しさを味わわせる指導である。つまり、外国語（英語）を通じて、コミュニケーションを継続し、これまで知らなかったことを発見することで、人とのかかわるよさを味わい、自己の高まりを実感できるような指導である。このような学習指導を進めていくことで、グローバル社会を生き抜くために必要な「適応性」が育まれると考える。

(1) 考えるよさに気付かせる学習内容設定の視点

単元内容を設定するに当たっては、これまでの本校の単元内容を生かしながら、現行の外国語活動の内容に加除した形で、以下のような視点を踏まえ設定する。

- ① 英語を使って積極的にコミュニケーションを

図ることの必要性を感じ、学びたいという知的好奇心を喚起させるもの。

② 図2のように子どもにとって身近なコミュニケーション場面を設定し、内容の系統性や発展性をもたせ、学びの有用性を感じさせるもの。(図2)

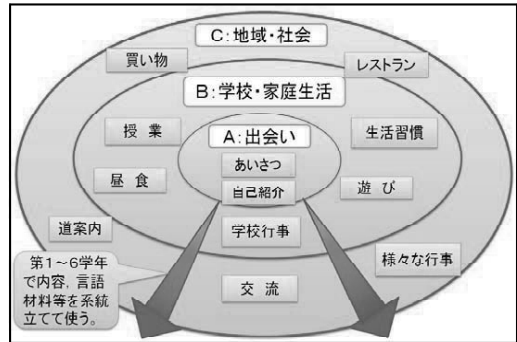
③ 「聞く」「話す」活動を中心に、これらを補完するための「読む」「書く」活動も取り入れながら、英語を自信をもって使えるようにし、英語を使ったことの喜びを味わわせるもの。

これらの視点は、「適応性を育む外国語活動」を創造する際にも大切にしてきたものである。しかしながら、ここでは、考えるよさに気付かせる学習内容を具現化できるよう①～③の内容を再考し、付加しながら以下のような考え方で捉えることにした。

①については、まず、できるだけ英語を本当に使いたい伝いたいと感じさせるものである。その要素としては、より具体的に相手意識がもたせられるものである。具体的には、コミュニケーションの相手を外国の人にしたり、中学校の先生にしたり、普段かかわりの少ない他学年の子どもにしたりすることである。そうした相手とコミュニケーションを豊かに図るためにどのようにすればよいか考え、コミュニケーションの面白さや難しさに気付く、次も英語を通してかかわりをもちたいと思うようになることと考える。次に、外国の言語や文化と日本のものと比較し、相違点や共通点に気付くことで、異文化を体験的に理解することのよさを味わわせられるものである。例えば、アフリカの人と交流を図ることでアフリカの子どもたちの様子を知り、外国や日本のよさが分かってくる。この時、日本だけでなく、もっと人とかかわって外国のことを学びたいと思うようになる。

②については、子どもにとって、興味・関心が沸くような図2のような身近なコミュニケーション場面を基本として、第1～6学年の学習内容の系統性、発達の段階を加味していく。学習内容に系統性や発展性をもたせることで、子どもはこれまで学んだ英語を安心して使いながら、コミュニケーションを図ることができる。また、どのように知っている英語を使えばコミュニケーションが发展させられるか考えることにもつながる。内容

に系統性や発展性をもたせることは、子どもの思考の流れをより活性化する要素となり得ると考える。



【図2 コミュニケーション場面の設定】

③については、これまでの考えを生かした音声重視のコミュニケーション活動を中心に、子どもの実態に応じて「読む」「書く」活動も取り入れる。特に、聞く活動（Input）を重視しながら、聞いた英語をどのように話すか言語処理の手助けとなるよう、文字情報として「読む」「書く」活動も取り入れることで、より自信をもって話すこと（Output）ができるようにする。このようにして、英語をツールとして運用することで、外国の多くの人とコミュニケーションを図ることにつながり、子どもが学習した後に、「英語を使えるようになってよかった。」と喜びを実感できるようなものにしていく。ひいては、「英語」という言語そのものの魅力を味わわせることである。

(2) 考えるよさに気付かせる指導方法

上記の視点を基に、学習内容を改善するとともに、子どもが考えるよさに気付くような指導方法を設定していく。

① 学習課題の提示の工夫

これまでの外国語活動においては、多くの場合、行動目標的に課題の提供をしてきた。そこで、子どもがより課題意識をもって、また主体的に考えながらコミュニケーションを図っていくことができるように、問題解決型の到達目標的な課題の提示を行うことにした。

対象学年：第6学年

<行動目標型>

○ 一年生に英語で「桃太郎」の劇を見せよう。

この型でも内容によっては、子どもの学ぶ意欲を十分にかき立てる場合がある。それはほとんど

の場合、子どもの内的動機を揺るがすものである。しかしながら、これまでの課題として活動が教師主導型になりがちで、子どもが考えてコミュニケーションを図ろうとする姿があまり見られなかった。例えば、多くの場合、劇の台詞がこちらから与えたものになってしまい、相手は一年生という対象を忘れてしまって、英語を流暢に話すことに夢中になり、練習をしてしまうのである。そこで、以下のような目標に改善した。

＜到達目標型（問題解決型）＞

- 一年生に英語で「桃太郎」の劇を見せるにはどのような工夫が必要だろうか。

このような目標によって、子どもはどんな内容や方法が必要か考えるようになる。実際、子どもたちは自分たちで以下のような工夫をすることができた。

「川上から流れてきた桃を英語で“peach”と単に言っても、面白くないかもね。」

「“big peach” にしたら？」

「もっと大きなイメージをもたせたいな。」

「“Giant peach” なんかどうかな？」

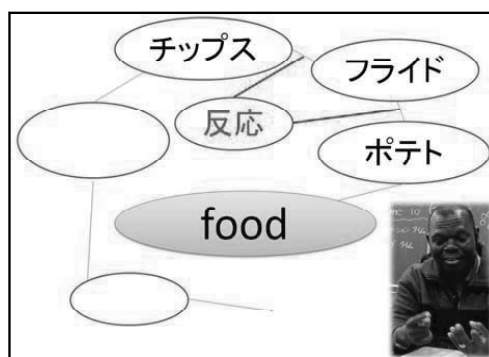
「すごく大きいというイメージがわきそうだね。」

また、セリフの工夫だけでなく、ジェスチャーも加えたり、言葉に強弱を付けたりする等して工夫する姿が見られるようになった。

② イメージを膨らませるワークシートの活用

これまで、子どもたちは会話の内容を発展させたくてもなかなかその方法が分からないという状況が見られた。そこで、図3のようなワークシートを用いて、これまで学んだ英語を用いながら、どのようにすれば会話ができるだけ長く続き、相手のことを理解することができるか考えさせた。(図

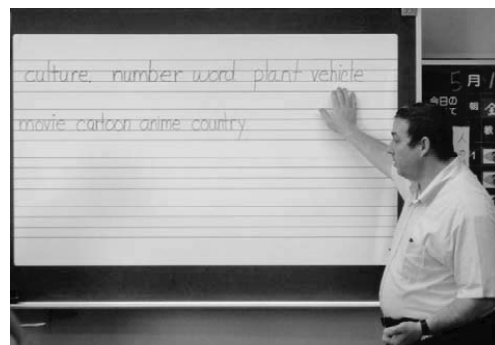
3)



【図3 会話を発展させるワークシート】

③ 「ツールボックス」の活用

自信をもって英語を使うために、文字情報の活用も図ることにした。子どもたちが実際に使いたい英語をA L Tに質問し、黒板に書いてもらう。その英語を写すことで、使うための自分なりの英語ノートができる。そのことが、英語が分からない場面に遭遇した際、書き記した英語を見せながら、コミュニケーションを継続させる一つ的手段として活用されることになる。



【写真 子どもが書きたい英語を示す】

4 授業の実践

これまでの研究内容を踏まえ、第6学年で実践を行った。特に、考えるよさに気付かせるよう、英語を流暢に話すことを目的とするのではなく、話すためにどのようにするか実際の場面を想定しながら考えさせるようにした。

(1) 単元名 “What () do you like~? I like~.”

～広げよう、つなげよう、君の思い～

(2) 目標

相手を理解するために必要な英語の表現の一つである “What () do you like~?” を使いながら、積極的にコミュニケーション活動に取り組む。

(4) 実際 (3/4)

また、つなぎ言葉 (うなずき、繰り返し等) 等を用しながら互いの思いをつなげたり、広げたりしてコミュニケーションを継続・発展する。

(3) 展開に当たって

来校するアフリカの人と互いに理解し合うために、英語を使ってコミュニケーションを図る機会を多く設けるようにする。また、話す意欲をより高めるために、“What () do you like~?” の () 部分に自分が尋ねたいことを入れ、どのように表現すればよいか考えさせる。その際、出てきた英語は黒板に A L T が書き、使えるように口頭練習させ、会話を広げるように働きかける。

過程	主な学習活動	主な語彙や表現	時間	教師の具体的な働きかけ
意欲をもつ	1 Communication Time			
	2 Watching Skit	A: Hello!! B: How are you?		
	3 Meeting today's target Let's Doing Introduce. ・好きなものを尋ねたり、紹介したりできるようにしよう!	A: I'm tired, and you? C: Me too, and you? D: No, I'm sleepy.	8	○ 必要感をもって英語を使う意欲を高めさせるために、6 のほで実施した「アフリカの人に聞きたい好きな○○Best 5!」の結果を基に、めあてを設定する。
つかむ	4 Practice	A: What sport do you like~? B: I like soccer.		○ 自己紹介に必要な英語を使うようにするために、ペアで好きなものを尋ねる会話をさせる。
	5 Pair Activity I	A: I like basketball. B: Me too.	5	○ 自己紹介で使う英語を増やすために、「好きな○○Best 5!」に入っている英語で、アフリカの人に尋ねたい○○の英語をワークシートを使って A L T や J T E、友達と協働しながら考えさせる。その際、アフリカの人が興味をもったり、答えたりできるような内容であるかを考慮させる。
	6 Meeting 食へ物、景色、好きな○○、楽器、動物	【話し合い例】 C1: アフリカの人に好きなアイドルとか聞いても分からないよ。 C2: じゃあ、動物はどうかかな? C3: 日本との違いがあるかもしれない。おもしろそう。 C1: 「かば」って英語で何というのかな?	22	○ 好きな○○を英語を使って話することができるようにするために、グループで互いに尋ねたり答えたりするゲーム活動を取り入れる。
挑戦する・広げる	7 Activity ・英語の使用量 ・表情・声量等			○ 英語が使える楽しさを実感させるために、相手の気持ちを踏まえつなぎ言葉も活用しながら好きな○○を尋ねる会話をさせる。
	8 Pair Activity II	A: What sport do you like? B: I like soccer. A: Soccer? Good! B: What animal do you like? A: I like cats. B: Me too.		○ 自分が知った英語に慣れ親しませるために、書きたい単語をノートに写させる。
	9 Pair Activity III	<単語例> music, sports animal, food		○ 自他の成長を味わわせるために、「英語を使って話したり書いたりして楽しかったか。」と問い、感想交流をし、活動の称賛をする。
振り返る・生かす	10 Writing 11 Reflection Time たくさん英語を使って話ができ楽しかったよ。早く外国の人と交流がしたいです。		10	

(5) 考 察

・単元の導入において、「どのようにすればアフリカの人たちと会話が続けられるだろうか。」と問題解決型の目標を設定することで、コミュニケーションの内容や方法をよりよくしていく姿が見られたことから、単元の導入におけるめあての提示の仕方が重要であることが分かった。

・思考させる段階でワークシートを活用することで、相手を理解するための内容やコミュニケーションを継続させることにつながれたことから、思考の学習指導を今後も研究していくことが求められる。

・自分が書きたいと思う英語を書き写すことで「英語」という言語そのものに興味をもつ子どもが見られた。書き写すことで、今後のコミュニケーションにどのような効果があるのかを追跡研究していく必要がある。

5 研究の成果と課題

＜成果として＞

互いの意見を基に、コミュニケーションを多面的に見直し、活動を改善していくことで、英語を使う楽しさや考えるよさを味わったり、自信をもって活動したりする姿が見られた。

＜課題として＞

思考することのよさを実感させるために、指導方法の充実を図るとともに、よさに気付かせる振り返りの仕方についても、今後追究していく必要がある。

【参考文献】

○鹿児島大学教育学部附属小学校(2013)『個の確立を目指す授業の創造』(鹿児島大学教育学部附属小学校平成25年度研究論文集)、鹿児島

○文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説：外国語活動編』東洋館出版社、東京